

創造生活の条件（中）

矛盾と統一

水と波

海に、断えず波が打っているように、人生そのものにも、不断に小波大波の休むことのないのはもちろんであります。もし風さえなかつたならば、海は鏡の如く、静かでありましょう。しかしもし、三百六十五日、海が鏡の如く、静かで変化がないならば、海は何という殺風景なものでありましょう。油を流したような春の海の夕日も美しいが、怒涛狂乱、冬の日に岩壁に碎ける荒磯も亦、棄て得ない壮絶美であります。この男性美、彼の女性美、いづれも、風によつておこされる趣であります。すでに風あるが故であります。

我等の住む、社会も亦一つの海であります。宇宙も亦海であります。この海に風がなければ、この天地宇宙、社会人生も亦、殺風景な所となるであります。而してこの風とは何でありますか。一緒に大乘起信論を拝読しましょう。

「一切心識の相は、即ち是れ無明の相にして、本覺と一に非ず異に非ず、是れ壊すべきに非ず、壊すべからざるに非ず。海水と波と一に非ず異に非ず。波は風に因つて動ず。水性の動ずるに非ず。もし風、止む時は、波動は即ち滅するも、水性の滅するに非ざるが如し。衆生も亦爾り。自性清淨の心、無明の風動によつて、識の波浪を起す。是の如きの三事皆形相無く、一に非ず異に非ず。然も性淨心は、これ動識の本なり。無明滅する時は、動識は随つて滅するも、智性は壊せず。」

読んだだけではおわかりにならない方もあるかも知れませんが、大海の波は風によつておこる。人生の波も心識の波も、無明の風によつておこることだけはわかつたと思ひます。大海の本性は水である。宇宙の本性は真如である。真如の海水に無明の風がふきすさぶ所に、あらゆる現象の波がおこるのであります。大海に波がおきても、水性に變りはなく、生滅の波がおきても真如の本性に變りはありません。風あるが故に動いて波を生じ、無明あるが故に動いて生滅の現象界を出現し、心識の作用をまきおこすのであります。

仏と凡夫

仏陀は、真如（法身）を覺つて、仏陀となり、凡夫は、生滅、無明の波を喰つて、生死界に溺惑するのであります。生死界にあつて疑い惑うが故に、その生活が死んでくるのであります。

真如に増減なく、生滅なく、無常なく、罪汚なく、もとより動乱のあらうはずがありません。如何に暴風吹き荒んで、八寒冷水、万物を煩惱無明の凍結の中に苦惱せしめようともし、或は一切衆生が、弱肉強食、等活地獄の屍山血河、五逆十惡、阿鼻叫喚の大地獄を出現して火焰天を焦がそうと、真如法性の本性の寂靜に變りはありません。それはあたかも、大洋に幾丈の大波がおころうと、水の本性に生滅のないのと同じであります。

以上は仏教教学の根本に横たわる仏陀の自証の風光であります。随つて仏教である以上、この根本的な智の世界を無視しては、何派も、何宗もあり得ないのであります。

如来は、この真如の本性、絶対の寂静を体観し、自証して、寂静の都に大寂定に住するものであり、凡夫は、無明の波に翻弄せられて、この真如の本性に通達し、覺了し、安住せざるものであります。

動静一如

天地も宇宙も、社会も人生も、我も人も、皆転るコマであります。無始無終に廻るコマであります。永遠に無明の風に動転してやむことなき世界であります。随つて人生に於てはこの無明の動乱は永遠にやむことなきことを諦観すべきであります。もし、観念のおきかえ、自己改造、社会的施設等々によつて、この波乱を休止することが出眷と考える者がいるならば、彼はその人生及び宇宙に対する認識に一大誤謬を持つものであります。

すでに人生は永遠に生滅動乱である。輪廻するコマであると申しましたが、その全動の唯中にこそ、一つの静寂を見ることが出来ます。即ちいわゆる動静一如の境であります。動をはなれて静を求める者は山に人生を逃避しました。けれども深山幽谷にして猶、松の風、谷の音、心臓の鼓動を消すことが出来ましょうか。ましてや、心識の妄想の波を如何にしましょう。

絶対の静寂は、廻るコマの中にのみ求めらるべきであります。無明の風、如何に生死大海の波を動乱せしむるとも、その真如の本性は寂静そのものであります。釈尊はこの生死の内奥に悟入して遂に大寂定三昧を得証されたのであります。されば、仏教の真髄は、生死即涅槃、煩惱即菩提と説かれ、迷悟を一異不可得の中に談じ、仏と凡とを明確に分ちつつ、しかも仏凡一体を信証すべきことを教えるのであります。

苦楽

苦には楽を伴い、楽には苦を内含する。従つて、無明相たる現実の中には大楽あることなく、若楽共に苦であることを提唱されたのは釈尊でありました。現在、世界はいわゆる機械社会出現のために物質の生産過剰、失業者の激増をおこして大苦悩の中に立たされましたが、これは実に、蒸気機関と電力機関を発明したことに原因するのであります。汽車汽船、電燈、電話、電車等々に便利幸福を受けるかわりに、それと同時に、今日のこの苦悩は生みつけられていたのであります。誠に苦樂一如、生死海の当然の相であります。而して誰がワットによつて蒸気機関が発見せられた時、今日を考えたものがありましょう。

矛盾と統一

ここにおいて、我等は考えなくてはなりません。世界は全て、何時でも、何処でも、矛盾であることを。而して、世界は全て、何時でも、何処でも、統一であり、調和であることを。何時でも矛盾であると共に、何時でも調和であり統一である。

親鸞聖人は、南無阿弥陀仏一元の信の世界に更生して「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのことみなもてそらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはします。」と告白せられました。「一切心識の相は、即ち是れ無明の相」なるが故に、もしは煩惱、もしは無常、ことごとくそらごとたわごととして全否定せらるべきであります。しかも真如法性の内奥より自然に発願廻向せる如来の本願、南無阿弥陀仏の大行は、一切の矛盾を否定しつつ、しかも大行それ自身を全肯定してゆく、煩惱罪惡そのままを転じて功德たらしめる円融なる絶対価値でありました。誠に如来は、永遠に、無為涅槃界に寂定しつつ、限りなく生死動乱の世界に神通応化して、その本願を名告るのであります。この如来の自然の名告り、南無阿弥陀仏の召喚を聞く所、生死大海の波いよいよ荒涼たる時、ますます弘誓大船の寂靜を体感するのであります。仏と凡夫は永遠に二にして又仏凡一体であります。

この信心の智慧の天地に於いてのみ、矛盾、統一をさまたげず、統一、矛盾を却^{しりぞけ}ず、如何なる境遇に至ろうとも、よくその裏に、この統一調和に永遠微笑して、而して敢て人生の矛盾相を捨離しようとはしないのであります。荒屋^{あばらや}は依然として荒屋にして、しかも中秋の明月にvari^{なり}なきこと、ここも亦瑠璃の御殿に異らず。この信なければ金殿玉楼必ずしも安住所ではありません。

常識的な生き方をしている人間は、何か異常な不幸が見舞つて来ますと、たちまち人生の矛盾に泣き憤つて、その生きてゆく道を失い、自暴自棄に陥り、或はただ逃避的態度をとつて、いよいよ無明の惑いを深めてゆきます。これらは皆、その根本に大信を失つていて如何なる矛盾相の中にも一大統一あることが見出せないからであります。

であります。苦悩や不幸に出会えば悩み苦しむのが当然であります。決しておそれず、悩みぬくべきであります。苦しみぬいて遂に、その不幸の中に更生する時、如何なる苦悩も、矛盾も、その人を真に生かす尊い経験となるであります。人生には矛盾のあるもの、而して決してその矛盾は全てとり除いて生きる天地があるのでなくして、矛盾それ自体の中にこそ、人生の意義も幸福も見出されてゆくことを体感すべきであります。何処に我を殺す矛盾があろう。唯求むべきは、はつきりとした信心の智慧、正しき認識であります。

唯一人息子を力とたのむ未亡人が、その息子の上に全力を注いで大学を卒業させ、卒業すると死んでしまったために、大悲観におち、遂にこれあるが故に、真人生に覚めて、新しい歓喜の生活に入った人がある。

目や、耳や、足や、手が不具であるために世の光となり得た人、矛盾に泣いて後、信の世界に、新らしき自己を創造した人はいくらもある。

世界は今や大きな矛盾相を表に現しました。しかし決して悲しむべき何ものもない。これこそ天地の相である。やや大きい波でしかない。いよいよ、寂靜の本源に寂定して、この大波を悠々と乗りきるべきであります。